

# 教師と子どもの学びのプロセスへのアプローチ： 教室からの教育心理学理論の構築

企画・司会：秋田喜代美（立教大学）

企画：森 敏昭（広島大学）

話題提供者：佐藤 学（東京大学）

麻柄啓一（千葉大学）

浅田 匡（神戸大学）

伊藤亜矢子（札幌学院大学）

指定討論者：無藤 隆（お茶の水女子大学）

近年、学びの研究は、＜学びの内容＞＜学びの空間・場＞＜学びの時間単位＞＜学びの表現形式＞など多様な視点から、これまでの教育心理学における教授学習研究の地平を拡張、問い直しを始めている。そして、学校・教室という場での学びの多層性を浮き彫りにし、学びのプロセスを促すものと同時に、歪めたり妨げる社会的・心理的要因、学びにより得るもの・失うものに目を向けてきていると考えられる。本シンポジウムでは、教室という場で何をいかに学ぶのか、またその学びを促すものと妨げるものについて、教師、生徒、学級、教師集団や学校制度とそれぞれ異なる視点から研究をされてきた方達に、具体的事例に沿って話題提供をしていただく予定である。教室からの教育心理学研究のおもしろさを指定討論者、フロアの方達と語りあう中で、これからの学びの研究を創り、教育心理学するアプローチを考えたい。

＜学びのアクション・リサーチへ＝

心理学的『神話』を越えて＞

佐藤 学

教室の学びに実践的に接近する試みは、いくつもの心理学的な神話を克服することを要請している。「基礎・基本」という神話、「漸進的進歩」という神話、「能力の無限の可能性」という神話、「正解と誤解」という神話、「発達段階」という神話、「知識＝情報」という神話、「学力」とその「測定可能性」の神話などは、教師の実践を内側から呪縛し、カリキュラムなどの制度以上の拘束力を発揮してきた。

この報告では、「学び」といういとなみをめぐる諸々の心理学的な言説が、研究者と教師との具体的な協同研究を通して、どう問題化され、どう再構成されてゆくのかを、私のこれまでのアクション・リサーチの経験を基礎として提示することにしたい。

アクション・リサーチは、創始者であるクルト・レヴィンが指摘していたように、対象とする心理的過程を中立的な技術的過程としてではなく、社会的・政治的過程の心理学的側面として認識することを要請している。さらに、その様式は、実験室における伝統的な心理学研究とは逆行するアプローチを特徴としている。心理学的概念の実践的文脈に即した再定義が要請されているのであり、＜単純さから複雑さへ＞、＜確実性から不確実性へ＞、＜単一性から複数性へ＞、＜実体的認識から関係的認識へ＞、＜普遍的定理の定立（多数の調査）から個別具体的な問題の認識と解決（一つの探究）へ＞などの志向が、アクション・リサーチの特徴をなしている。

このようなアクション・リサーチは、教師と研究者の協同において、「学び」の概念のどのような再定義へと向かうことを可能にするだろうか。さらに、その再定義された「学び」の概念は、教育の実践的研究と心理学の理論的研究にどのような課題と可能性を提起しているのだろうか。具体的な事例に即した報告を試みたい。

＜「学び」の成立とは「日記」の成立である＞

麻柄啓一

(1)『〇〇学の基礎知識』で勉強している大学院受験生に以前出会ったことがある。この学生に限らず、「学ぶ」ということは自分の頭の中に「百科事典」を作ることだと考えがちだ。しかし「学ぶ」ということは、実は、「日記」を作ることなのだとは私は考えたい。

(2) 日記とは＜主観化された内容＞を書くものだ。「自分にとってこんな世界が広がってきた」「これまでの経験とこう絡んできた」「考えがこう変わってきた」「友人はあんなことを考えていた。

（スゴイ。おかしい）」「あいつらと一緒に考えたから分かった」「自分はこんなことに興味を持